それは奇跡を起こす者

ジェフティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それは奇跡を起こす者

【Ｎコード】
Ｎ３２４０Ｚ

【作者名】
ジェフティ

【あらすじ】
もう一人、男性のＩＳ操縦者がＩＳ学園に入学していたら？というテンプレ設定と作者の妄想から生まれた産物。
オリ主がきっといろいろ頑張るよ！
注意：豆腐メンタルの持ち主なので優しくしてネ！

第一話「男二人」（前書き）

思いつきで始めてみました。
とりあえず最初は原作をなぞりますよ！

第一話「男二人」

＞インフィニット・ストラトス＜
「宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、束が引き起こした「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなった。」

最初はただ趣味が高じて少しずつ組んでいただけだった。
あてがわられている研究所の片隅でひっそりとだ。
この世界でもはや知らない者はいないであろう、あの篠ノ之　束博士に近づきたいと思い、自分の手で一から。
そう、陽の目に当たるなんてこれっぽっちも考えてなかった。

ああ、僕のことはどうでもいいんだ。重要なのは彼とこの子。
この子のことは後ででいいとして、まずは彼のことを少しだけ話そうか。
今から少し前のことだね。女性にしか反応しないと言われた＞ＩＳ＜を起動させた少年が現れたんだ。
その子はなんとあの「ブリュンヒルデ」の弟さんだったんだ。確か、そう「一夏」君と言ったかな。
一夏君がＩＳを起動させたことによって全世界で一斉に男性による＞ＩＳ＜起動試験を実施したのさ。
もちろん、僕もその試験を受けたけれど結果は当然の如く惨敗。うんともすんとも言わなかったよ。

その中で唯一、日本から二人目の男性ＩＳ操縦者が発見された。そしてその彼こそが僕が製作していた子を所望している・・・、まぁ・・・なんというのか変な子だったのさ。
いや、嬉しい気持ちもあるのさ。なんといっても男の浪漫というのが詰まっている子だからね。
しかし、まさか製作コンセプトとまるっきり同じことをいうとは思わなかったよ。
え、どんなコンセプトなのかって？

それはね・・・「重装甲でありながら超大推力での高機動を可能にする機体」というコンセプトなんだ。

さて、そろそろ送る準備をしないといけないな。ん、なにかな？この＞ＩＳ＜の名前？

ふふふ・・・。この子の名前は奇跡（トールギス）を起こす者って言うんだよ。

●それは奇跡を起こす者

第一話「男二人」

「全員そろってますねー。ＳＨＲをはじめますよー」

黒板の前で空間投影型ディスプレイに自分の名前を浮かばせ、自己紹介をしていた女性――山田真耶先生――が声を上げる。

ＳＨＲか、まさかまた三年間も学校に通うことになるとは・・・。

いや、それはいい。誰か胃薬をくれ。頼むから！

チラリと隣を見る。あ、こちらさんも同じような顔してるわ。えっと確か織斑（おりむら）　一夏（いちか）って言ったっけな。

というか、なんだ。この席の配置は？なにか人為的なものを感じる。

俺、いや、俺たちは見世物じゃないんだが・・・。

あ？何をそんなに辛そうにしてるんだって？

だって・・・俺と隣の織斑以外、みんな女なんだよ・・・。

覚悟はしていたんだ、覚悟は！しかし、実際にこの視線に晒されるときつい。あまり人と接しあうことが得意ではない俺からすればこれは拷問にも等しい状況だぞ・・・。

なんで、なんでこんなことに・・・。

全世界＞ＩＳ＜男性適正試験。

俺もご他聞に漏れずに受けさせられたのだ。
正直、＞ＩＳ＜にはめちゃくちゃ興味があった。だって、空飛んで剣や銃を振り回すなんてかっこいいだろ？
でも、女性にしか反応しないっていうのはもう常識として捉えてたからか期待なんてこれっぽちもしてなかった。
だといのに俺は起動に成功してしまった。まずそこにいた人間が皆、呆然としたのは言うまでもない。
だが、俺はこの時、別のことを考えていた。

ああ、決まってた就職どうしよう・・・。

そうなんだよ、俺ここにいる子達と違って年上なんだよ。１８歳で高校卒業後、就職する予定だったんだ。
どうも就職先には政府が支援金とやらを出したそうだ。ご機嫌な様子で連絡が来てた。
ま、身寄りのない俺はこういうことに都合がいいんだろう。気づいた時には周りがガッチリ固められていた。
あれよあれよという間にこのＩＳ学園への入学が決まっており、専用機の用意をというところで自分の意見を出した。
どうせなら自分の趣味に合う＞ＩＳ＜を専用機にしたい。折角、＞ＩＳ＜に乗れるんだし、珍しい男の操縦者になるならこれくらいの

わがままは聞いてくれるだろうという打算的な考えのもと頼んだのだが、見事に的中したんだろうか。そのとおりの＞ＩＳ＜を用意してくれることになった。

いやはや、言ってみるものだな。

┣パアンッ！┫

ハッとなって音をする方を見る。いつの間にか自己紹介が始まっていて、もう織斑のところまで来ていたようだった。

まて、じゃあさっきの音はなんだ？

織斑が盾になっていて見えなかったがその奥に黒いスーツを着て出席簿を掲げた女性が佇んでいた。

そう、佇んでいるだけなのにどこか威圧感を感じる。

「諸君、私が織斑（おりむら）　千冬（ちふゆ）だ。君たち新人を一年間で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干１５歳を１６歳になるまで鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

うん、クールビューティーな方からこんな鬼教官みたいなセリフが飛び出すとは思わなかった。

あ、なんだろう。俺の中の幻想が一つガラガラと音を立てて崩れた気がする。

それよりもこうクソを垂れる前に言葉の前後にサーを付けろと言われて困惑しないのだろうか、このクラスの子たちは。

なんて心配もよそに沸きあがったのは予想だにしなかった黄色い歓

声だった。

「キャーーー！千冬様！」

「ずっとファンでした！！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！」

てな具合だ。

待て、そういえばこの人、「織斑　千冬」って言わなかったか？それって第1回ＩＳ世界大会（モンド・グロッソ）総合優勝して＞ブリュンヒルデ＜って称号で呼ばれてるあの有名人のことじゃ──「私、お姉様のためなら死ねます！」──おい、こら。大丈夫かこのクラス。

「・・・毎年、よくもまあこれだけ馬鹿者が集まるものだ。私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

うわ、すごい鬱陶しそうな顔してる。いや、着飾ってないのはかっこいいんだけど少しくらい期待に応えてあげてもいいんじゃないか？

「お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躾をして！」

ごめんなさい、織斑先生。かっこいいままでいてください。

俺の見通しが甘かった。まさかあまり人と接していなかった弊害がこんなところででるとは！

これが１０代女子のパワーという奴か。こんな中で３年間も？胃が

消滅するわ！

しかし、さすがは世界中から人が集まっていることもあってすごいなＩＳ学園。超一流のＩＳ操縦者が教師だなんて。
いや、教官か？
それに人だけじゃないな。技術も世界最先端だ。空間投影型ディスプレイなんて初めて見た。
交通手段も乗り心地のいい静かなモノレールだし、付近を走る車もエコロジーな電気自動車だ。

うんうん、なんて頷いていると再び、いや、実際には三度。出席簿と人の頭が交通事故を起こした音が響いた。

「織斑先生と呼べ」

当然です。たとえ、罰ゲームでも「千冬ちゃん」なんて呼んでみろ。下手したら上半身と下半身、もしくは右半身と左半身が永遠にさよならするかもしれない。

「・・・はい、織斑先生」

「え・・・？織斑くんって、あの千冬様の弟？」

ああ、苗字が一緒だもんな。顔つきなんかも似てるしご兄弟でしょうよ。

「それじゃあ、＞ＩＳ＜が使えるのも関係して・・・」

え、じゃあ俺なんなの、突然変異？それともどこか親戚だったりするんだろうか？

親族関係一切わからないから困ったぞ。

「ああっ、いいなぁっ。代わってほしいなぁっ」

今のセリフを言った子はきっと背後に百合の花をたくさんこさえていそうだ・・・。

「まあいい、席につけ馬鹿者。次は加地、自己紹介をしろ」

切れ長の目が俺を見据える。うん、怖い。綺麗だけど。

いきなりこっちに指名されたせいで硬くなりつつ席を立つ。結構な勢いで。

「は、はい！加地（かじ）綾斗（あやと）、東京のはずれから来ました！これからよろしくお願いしませウッ！？」

噛んだ。凄い大事なところで。

周りから冷たい目線を一身に感じている。頼む、誰か笑ってくれ、そうすれば少しは救われるから！

ここでタイミングよくチャイムがなった。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれから＞ＩＳ＜の基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

触れないでいてくれるのは優しさなのでしょうか、織斑先生。僕はもう心が折れそうです。

いっそ、クラスで笑い者にしてください。と思いながら突っ立って

いたらポンと肩に手を置かれた。
そちらを見ると思ったよりも背は高くない織斑先生のお顔が。

「加地、座りなさい」

「・・・はい」

あまりにも優しく言われた俺の目からはダムが決壊したかのように涙が流れた。

第一話「男二人」（後書き）

実は完全に見切り発車。
友情を出来るだけ推したいけど恋愛どうしような状態です。
この子ヒロインにしてみない？なんて案ありましたら是非ご意見くださいませ。

誤字脱字感想等お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3240z/

それは奇跡を起こす者

2011年12月11日10時46分発行